

海という名の本屋が消えた (83)

平野義昌

諏訪山境界(1)

1933年から35年(昭和8～10年)、宇野千代は「中央公論」に小説「色ざんげ」を断続的に4回掲載した。洋画家・東郷青児の告白をもとにした小説だ。神戸諏訪山が登場する。

千代と青児の関係は複雑だ。29(昭和4)年12月から30(昭和5)年5月まで千代は報知新聞に小説「罌粟はなぜ紅い」を連載する。29年10月から12月、神戸に滞在して関西各地を取材した。大阪の梶井基次郎が題名をアドバイスした。物語は、男が妻に刃物で復縁を迫る無理心中事件から始まる。妻は既に新しい家庭を持っていた。男だけが生き残り、罪を償って社会復帰。亡妻の娘が成長、外国人に監禁されガス事故に巻き込まれる。男が助け出すが、娘は犯人の子を身ごもっていた。年月が経ち、娘は歌劇の花形女優になっていた。因果が絡み悲劇が続く。補註1

千代はこの小説のため青児に取材を思い立ち、手紙で申し込んだ。29年3月、青児は恋人と心中事件(刃物とガス)を起こし、大きなスキャンダルの渦中にあった。千代は上京当初のレストラン勤務時代に青児と知り合っていた。30(昭和5)年4月、二人は面談し、その日から青児宅で同棲してしまう。千代は才能ある美形文化人に惚れるし、惚れられる。このとき青児は首の傷跡に白い包帯を巻いた状態、蒲団には事件の血痕がこびりついたままだった。註1

青児には忘れることのできない愛の証だったのだろう。

青児の絵は描けば売れた。金遣いも派手だ。そのうえ千代と住む洋館を新築する。千代も絵を売りに歩き、大阪・神戸にも足を伸ばしている。経済的に落ち着くと、青児は心中事件のことを話し始めた。それが「色ざんげ」。文字通り恋多き男の懺悔である。補註2 フランス帰りの画家・湯浅は妻子と別居状態。カフェやダンスホールで遊び、良家の娘とゲームのような恋愛を楽しんでいる。本命の相手は高級軍人の令嬢・つや子、父親は交際を認めず、彼女を渡まさせる。傷心した湯浅はパーティーで知り合ったとも子と結婚する。正妻とは離婚未成立だ。まもなく、とも子はボーイフレンドと失踪。神戸滞在の情報を得て、湯浅と彼女の母親が追う。〈翌朝神戸へ着いたのは九時を何分か過ぎていた。僕は自動車を駆ってオリエンタルホテル、東亜ホテルと探して歩いて最後に諏訪山ホテルへ行き(後略)〉註2

宿泊名簿に偽名ながらも子の筆跡があった。既に広島に向けて出発していた。湯浅は汽車内でも子を発見すると母親に任せ、須磨駅で下車し、東京に戻る。湯浅は帰国していたつゆ子と郵便局留めの電報で連絡を取り合っていた。最後は無理心中事件である。

湯浅らは最終汽車に乗車したので神戸滞在は半日のみ。ホテル、三宮駅(現在の元町駅)、神戸駅、中央郵便局などを巡っているが、肝心の「諏訪山ホテル」はフィクションである。

諏訪山には温泉があり、料亭・旅館が軒を並べていた。今その面影はない。諏訪山は山の名、山上の諏訪神社にちなむ。神社は仁徳天皇の時代に信州諏訪大社(7年ごとの御柱祭で知られる)から奉斎されたと言われる。山の麓は旧「中宮村」、古代から6戸の家が神社と古墳を守る特殊な村だった。

山一帯は諏訪山公園、麓に町名「諏訪山町」があるものの、兵庫県庁北側(中山手通、山本通)を広く諏訪山と呼ぶ。官公庁街、文教地区、高級住宅街である。中山手通4丁目には神戸市立諏訪山小学校があった(統合され、現在こうべ小学校)。古地図「摂州神戸山手取開図」(1872年、横浜開港資料館蔵)に南北道路「諏訪筋通」が見える(註3)。県庁から諏訪山に向かう道路の元の姿だろう。

明治初期、諏訪山開発に大きな役割を果たしたのが県吏・関戸由義(せきとよしつぐ、本稿[75]参照)である。居留地造成、道路整備など神戸の都市計画を推進した。自らも土地投機に参加している。1875(明治6)年、近隣旧村(北野、花隈、宇治野、走水、二つ茶屋、神戸)の墓地を統合して、諏訪山の東側堂徳山の麓に共同墓地を造成した。77(明治8)年、南側の旧神戸村出郷・城ヶ口(じょうがぐち)(補註3)に本願寺派説教所(城ヶ口説教所、光尊寺)を誘致した。註4 旧村地域は今後の発展と住民増加が見込まれた。この不動産開発に地元の三志摩商会(旧三田藩主従による薬品商社)はじめ政商・豪商が動いた。

諏訪山は近隣村々の入会地だった。平地のあちこちには共有の農業用溜め池もあった。関戸が土地を購入したが、開発資金は乏しかった。71(明治4)年頃、京都の豪商・小野組に譲るも破産、官有地になる。73(明治6)年、兵庫県は諏訪山神社境内三千坪を公園に指定し、文明国としての公園整備を目指す。

同年麓で鉱泉が発見された。いろいろ本をめくると、発見者は「英人」としか記載されていない。「飲めば胃を治し、湯に浴すれば万病に効く」と伝えられる(註5)。花隈の料亭「常磐花壇」前田又吉(補註4)が関戸と三志摩商会の協力を得て「常磐楼」を出店、繁盛する。82(明治15)年には「常磐東店」「常磐中店」「福原常磐店」を出店。系列の店が宇治川河口、兵庫湊町にもあった。山を被うように続々と温泉料亭が建つ。図

宮崎修二郎の文学史が「中常磐」ゆかりの文人を語る。92(明治25)年頃、尾崎紅葉が中山手7丁目に住の文学仲間・丸岡九華宅に滞在し、入浴に通った。1901(明治34)年、ホトギスの俳人・中村楽天が宿泊した折、数日前の宿帳に半井桃水(樋口一葉の師)ら文人3人の名を発見している。註6

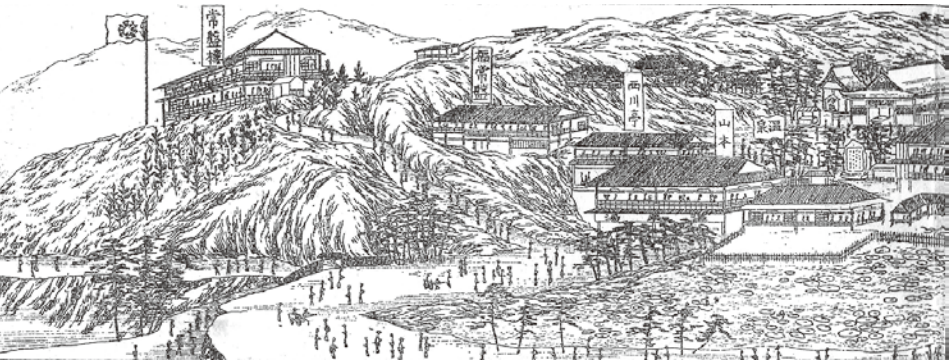
陳舜臣は中国の革命家・孫文(1866～1925年)の訪問を紹介する。孫文は同胞の多い神戸に何度も来た。1913(大正2)年、孫文は第二革命に失敗、台湾を経て亡命してきた。

〈ときの兵庫県知事服部一三は、失意の孫文を慰めるために、一夕宴席を設け、／＼踏まれても なお萌

えいづる春の野の 若菜や やがて花ぞ咲くらん／＼の短歌を贈った。／金星台の麓のやや東よりにあった料亭「常磐花壇」がその場所だったという。〉註7

温泉は子どもにも人気があった。〈……湯ぶねは子供が泳げるくらい広く、大きな冷泉の浴槽もあったため夏休み、子供の温泉行は泳ぐことがその最大の目的であった。〉註5

註1 宇野千代『生きて行く 私』上・下、毎日新聞社、1983年
 註2 宇野千代『色ざんげ』『宇野千代全集第3巻』中央公論社、1977年
 註3 大國正美編著『古地図で楽しむ神戸』風媒社、2019年
 註4 赤松啓介『神戸財界開拓者伝』太陽出版、1980年
 註5 『生田いまむかし』生田区振興連絡協議会(生田区役所振興課内)、1975年
 註6 宮崎修二郎『環状彷徨 ふるさと兵庫の文学地誌』コーベックス、1977年
 註7 陳舜臣『神戸ものがたり』平凡社ライブラリー、1998年
 補註1 「罌粟はなぜ紅い」は中国地方の村で始まり、関西各地から東京に舞台を移す。神戸では阪神電車灘道駅(現在の神戸三宮駅)が出てくる。
 補註2 千代と青児面談時期は連載終盤である。それまで手紙のやり取りがあったのか、単行本出版時に改稿したのか、不明。千代の小説「或る男の断面」(講談社、1984年)では電話で取材を申し込み、会っている。千代はお金のやりくりから青児の服飾、マナー、文章作法までこまごまと世話をした。小説を書けなかった、30(昭和5)年11月『罌粟はなぜ紅い』単行本(中央公論社)発行、青児が装幀。翌年、千代の掌篇小説に青児が挿絵を添え、装幀もした豪華限定本『大人の絵本』(白水社)出版。〈こんな理想的なカップルはめったにない筈なのに数年で別れてしまったのは、私の読みが浅く、宇野さんの稀に見る女らしさと濃やかな思いやりが掴めなかったことと、私が希代の浮気者だったためである。〉(東郷青児「宇野さんのこと」)『宇野千代全集第三巻』月報、中央公論社、1977年)
 33(昭和8)年、青児と心中相手の恋愛が再開する。青児にとっては永遠の恋人だった。『色ざんげ』完成前に千代と青児は別離。36(昭和11)年千代が創刊した雑誌「スタイル」で仕事上の関係は長く続いた。78(昭和53)年青児は旅先の熊本で急死。直前、千代に『大人の絵本』新版の計画を話していた。
 補註3 史料では城ヶ口は江戸期を通じて神戸村の一部とされる。朝廷から生田神社に賜った「神戸(かんべ)」44戸はことされる。「城」は、花熊城説と再度山の多々部城(室町末期の山城)説がある(『角川日本地名大辞典28兵庫県』角川書店、1988年)。
 源平・生田の森の戦いで梶原景季一党が「籠の梅」「梶原の井」など奮戦する。城ヶ口村には功績を記念する「梶原二度憩の石」があったが、明治の市街地開発の際に消失した。戦後新しい碑が県庁近くの栄光教会に据えられたが、これも阪神淡路大震災復興工事中に行方不明になった。
 明治初め「城ヶ口筋」になる。1873(明治6)年南北5本の道路整備で「城ヶ口筋」完成。74(明治7)年「山本通」に町名改正(神戸史学会『新神戸の町名』神戸新聞総合出版センター、1996年)。1915(大正4)年、墓地は堂徳山に移転して、「追谷墓地」。28(昭和3)年、墓地跡に「国立移民収容所」ができた。地名「城ヶ口」は残っていない。
 補註4 88(明治21)年前田又吉(1830～1893年)は京都に進出し、常磐ホテルを開業(京都ホテルオークラの前身)。82(明治15)年、諏訪山に又吉の功績を記した「又吉泉記」の碑が建立された。図の右端に描かれている。死後の93(明治26)年、伊藤博文他、神戸政財界人によって顕彰碑と銅像建立。銅像は戦争で供出され、2つの碑は京都に移設。神戸に又吉の痕跡は残っていない。



「諏訪山温泉 常磐楼」の西半分。「豪商神兵湊の魁」(原本は1882年垣貫寛祐出版。1975年神戸史学会復刻)

乙仲通 境界の魅力と可能性

乙仲通 h3 活動報告 3

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会
 乙仲通境界デザインワークショップ実行委員会

レトロでお洒落な迷宮空間

まちあるきに参加した学生たちは、乙仲通境界のどういうところに魅力を感じたのでしょうか。たくさんコメントの中で、最も多かったのは境界の建築に関することでした。

そこで乙仲通沿いの88棟の既存建物を対象に、印象評価やその要因、利活用の状況、その分布について、詳しく調査を行いました。

特に乙仲通全体のイメージがどの様に形作られているのか、境界のイメージとして挙げられた「レトロ」、「お洒落・個性的」、「港町」という3つの視点で、性別・年齢が偏らない8名のメンバーで見て回り、それぞれの建物が持つ印象を数値化し集計する事で、客観的



「レトロ」または「お洒落・個性的」として、高評価だった乙仲通沿いの建築

神戸のアイデンティティー

かつて、神戸港は世界有数の港として栄えました。メリケン波止場周辺はその中心に位置し、金融業、貿易業など、多くの企業が事務所を構えました。時代は移り、国内の主要港は東京港などヘシフトし、アジアのハブ港として釜山港などが台頭し始めた頃、震災が追い打ちをかけ神戸港の隆盛は失われました。

また、荷役の形が変わりポートアイランドなどへ港の中心が移ると、海運業者で賑わった乙仲通境界では、建物の老朽化と共に空き室が目立つ様になりました。ところが並行する栄町通、海岸通ほど乙仲通では建て替えが進まず、レトロビルと呼ばれる当時の建物が幾棟も残る、昭和の風情溢れる場所となりました。その様な雰囲気、立地に加え手ごるなスペースや賃料等の条件により起業家、若手経営者達が、個性的な店舗やアトリエなどをレトロビルに開業する様になりました。

昨今、乙仲通に注目が集まっているのは、この様な自然発生的エネルギーにより、ありのままの古い建物が活かされ、人々を惹きつける場所になっているからではないでしょうか。これは「伝統的建造物群だから遺そう」と言った保存の考え方とは反対の在り様だと

に把握することを試みました。

まず境界に約30棟ある築50年以上のレトロな事務所ビルについては、小割りの貸室が多く、エレベーターや来館者用のトイレが無かったり、廊下や階段が狭かったりして分かつづらく、入りづらい建物となっていました。

しかし、個性的な店舗や様々な業種の事務所として利活用されていたり、印象も単に古びているとか不便だとか感じるのではなく、分かりにくさも迷宮的で、冒険心がそられるなど、肯定的にとらえる評価も多く、中でも栄町ビルディングや昭和ビルなどが「レトロ」で魅力的な建物として高評価でした。

それらは、主にタワーロード付近から東に点在していて、4～5階建以下のものが多く、

東に行くに連れ比較的新しい事務所ビルが多くなり、レトロな雰囲気は薄れていきます。

「お洒落・個性的」で高評価となった建物は、新しいビルも含め、入居するテナントや1階の使用形態によるところが大きく、それらは飲食店や物販店などで人が集まり、通りに賑わいを与えることとなっています。2～3丁目を中心に点在し、西へ行くほど高層マンションが多くなり、そういった雰囲気は薄れていきます。

「港町」で高評価となった建物は少なく、港町の印象は建物によるものではないですが、色使いや看板などの部分に現れていました。こうしたレトロな建築、奥深い迷宮的な空間に、お洒落で個性的な店舗が集まる街並みが、乙仲通境界の魅力を醸し出しています。

思います。建物保存において経済的な判断を避ける事はできませんが、乙仲通では型にはまった保存の方法では、潜在する魅力まで失われかねません。

神戸には旧居留地や北野町など、歴史的建造物を保存活用した街が整備され、大きな魅力、アイデンティティになっている一方で、震災で多くの歴史的建築物を失い、その後も多くの魅力的な歴史的建造物が失われているという現実があります。

また神戸には多くの「日本初」があり、「新しいもの好き」が神戸人気質の一つとされ、新しい街の魅力も多く、特に「株式会社神戸市」と呼ばれた頃は、ダイナミックな都市開発に全国から注目が集まり、これぞ神戸と多くの市民が自負したものでした。また神戸には、山・海というアイコンと歴史ある港のお陰で、古都としての京都、商都としての大阪に「お洒落な港町」をアイデンティティーとして、肩を並べる事ができていると思います。

私は昔の映画に見るワンシーンに憧れ、「風の吹くまま気の向くまま」駅に降り立っても落胆させられた覚えがあります。なぜなら、今は全国どこに行っても、すっきりとした駅舎やコンビニ、マンションなど見慣れた场景に出くわすからです。それは、映画のシーンより

遙かに清潔で安全な町並みでも、味気無さを感じずにはいられません。映画の中では、埃っぽい都会や剥がれた土壁、錆びた欄干にも趣を感じる事ができます。恐らく、それらに重ね合わせて人々の健気な営みや温もりが映し出されているからでしょう。

乙仲通境界には、そういった味わい深く個性溢れる街の魅力があり、神戸のアイデンティティーの一翼を担っていると思います。

しかし境界のレトロビルには、空き室も多く点在し、次々に姿を消し、高層マンションに建て替わってきていて、ヒューマンスケールで、ここにしかない街の風情も徐々に失われていく危うさを感じています。

乙仲通境界のレトロな街並みや、ここでの人々の営みもふくめ、こうしたもう一つの神戸のアイデンティティを大切に続けていける何らかの仕組み、新たな街ぐるみの取り組みが必要なのではないでしょうか。



久保田 淳司 (くぼた じゅんじ)
 ディーオーケープランニング神戸 L A
 B 代表／一級建築士／インテリアコーディネーター